

# 「燃やしたくないモノ」ボックス

“Thing someone doesn't want to burn” Box

新井翔太<sup>1</sup> 林かおる<sup>2</sup> 古川拓実<sup>3</sup> 高野弥空<sup>4</sup> 中野達樹<sup>5</sup> 村上騰夢<sup>6</sup>

ShoutaArai<sup>1</sup>, KaoruHayashi<sup>2</sup>, TakumiFurukawa<sup>3</sup>, MikuuTakano<sup>4</sup>, TatsukiNakano<sup>5</sup>

and ToumuMurakami<sup>6</sup>

<sup>1,3</sup> 京都芸術大学芸術学部プロダクトデザイン学科プロダクトデザインコース

<sup>1</sup> Product Design Course, Kyoto University of the Arts

<sup>2</sup> 京都芸術大学芸術学部舞台芸術学科演技・演出コース (スタイル「和文所属」)

<sup>2</sup> Directing and Acting Course, Kyoto University of the Arts

<sup>4,5</sup> 京都芸術大学芸術学部アートプロデュース学科アートプロデュースコース

Art Studies and Culutral Production Course, Kyoto University of the Arts

<sup>6</sup> 京都芸術大学芸術学部環境デザイン学科建築・インテリア・環境デザインコース

Architecture, Interior and Environmental Design Course, Kyoto University of the Arts

## 1. はじめに

「燃やしたくないモノ」ボックスは、私達が履修した芸術総合演習Ⅴという授業の中で生まれたものである。授業では、グループに分かれ「仕掛学を用いて身近にある問題を解決する」という課題に取り組んだ。

私達は、「家にある、手放したいけど手放せないモノ」に焦点を当てた。使い道はもうないが、思い入れや、思い出のあるモノが家の中に眠っている人はたくさんいるのではないかと考え、同時にそのモノを必要とする人が存在しているという仮説を立てた。そんなモノを次の誰かに受け継ぐ方法を考え始めた。

しかし、ターゲットが広すぎたため、考えに詰まる。そこで、ターゲットを学内に多く存在しているオタクに絞り、モノを「手放したいけど手放せない推しのグッズ」に限定した。

ここでの「推し」とは、一推しのメンバーを意味する略語“推しメン”をさらに略したもの。アイドル等のグループ内において、最も応援しているメンバーのことを指す。

そして、私達は過去の推しを次の人に受け継ぐための装置を考えた。モノが循環して欲しいという目的とともに、このボックスを通してコミュニケーションが生まれて欲しいとも考えた。

## 2. 制作

### 2-1. 工夫

ただボックスを設置するだけでは、モノを手放すという現状が生まれにくいと考え、ゴミ箱の「モノを入れる」ということを一目見て意識できるモチーフにした。そして、ゴミ箱によく書かれている「燃えるゴミ」や「燃えないゴミ」にかけて「燃やしたくないモノ」という名前を付けた。

### 2-2. 方法

本物のゴミ箱に似せるため、設置場所にあるゴミ箱を採寸し、ほぼそのままの形、大きさを再現した。制作は学内にある木工室で制作を行い、木材も全て木工室にある廃材を使用したため、制作費用は0円である。

ボックスの上にこの装置の使用方法を記載した説明文を貼った。内容は「あなたのお家にある手放したいけど手放せない推しのグッズをこのボックスに入れてください。ここで推しとはお別れですが、また新しい推しと出会うこともできます。気に入った推しを見つけたら自由にお持ち帰りください。別れを乗り越え、素晴らしい出会いがあなたに訪れることを願っています。」というものだ。

それに加え、学内のゴミ箱に貼られている貼り紙を模したものをボックスの上面に貼った。この際、紙の分別収集及び再商品化の促進の為に実際に使用されている「紙マーク」をアレンジした「推しマーク」を考案し、起用した。

アンケートは「置いたモノ」「元推しに別れの言葉」「持っていったモノ」「出会った推しに挨拶」という4項目が記載されている。内容を沢山書かなくても空白が気になりにくくするため、用紙はA5サイズにした。

## 3. 設置

### 3-1. 場所

京都造形芸術大学の正面にある大階段上のピロティにあるゴミ箱の隣。ゴミ箱の形をしているため、このボックスのみを設置すると中にゴミを入れられてしまう可能性があると考えた結果、わざと学内にあるゴミ箱の横に設置した。

### 3-2 期間

授業で与えられた期間である、2019年12月11日から12月24日の14日間である。

## 4. 反応

### 4-1. モノの動き

設置した初日に制作メンバーの一人が元推しのグッズを置いた。設置の翌日にはTwitter上で反応が現れ始める。2日目、神木隆之介のカレンダーなど、数点が持ち帰られるが、新しく置かれるモノはまだなかった。3日目、初日に置いたモノはほとんど持ち帰られ、新しいモノが置かれ始めた。4日目には、2日目に反応を示していたツイートが1.3万いいね、6千リツイートと、拡散されていた。これとほぼ同時にJタウンネットというウェブメディアから、ダイレクトメッセージで取材を受ける。翌日、Twitterでの拡散の効果はあまり出ていなかった。設置約1週間、ツイートは拡散され続けており、ボックスの中にも一気にモノが置かれた。持って帰る人も多く、場が回り始める。Jタウンネットの記事も完成し、そのすぐ後にライブドアニュースがJタウンネットの記事を転載し、さらに拡散される。設置1週間が過ぎてからは、頻繁にモノが入れ替わり、「果たしてこれは推しなのか？」と思うモノも置かれるようになり、そのまま最終日を迎えた。

### 4-2. アンケート

初日に25枚をセットし、17日に50枚を追加、20日には紙がなくなり、21日に30枚を追加した。書かれたアンケートは計98枚であった。アンケートには「自分の愛を形にした物としてグッズが見られている今、それが他人の愛の一部になるというのはとても良いな、と思いました。中古ショップだと「金」というものが残りますが、ここにあるのは思い出ばかりで気持ちが良かったです。」「可愛い えっ めっちゃ可愛くない！？我が家においでよ！！Welcome！！」「だれかわからんけど調べて今から推す。」などと書かれていた。

### 4-3. その他

ボックスの中に置かれていたモノやアンケートから、同じアイドルを好きな人がいると知り、イベントの際に挨拶がしたいと、モノを置いた人を探すツイートが軽く拡散されていた。その後、そのツイートの、モノを置いた人の友人がコメントをし、2人は無事に繋がる事ができた。

## 5. 考察

置かれるモノには、年季の入っているモノが多く、何年も前のグッズが置かれることが多かった。このことから、「長年家に眠っていた」「もしくは昔使用していた」など、手放したいけど、手放せなかったモノが、このボックスを設置したことで、息を吹き返したのではないか。

Twitterで拡散され、話題になった数日後に動きがあった。これは、このボックスが家からモノを持ってくる仕掛けのため、すぐには反応がなく、動きがみられるまでに時間がかかったのではないかと考える。

## 6. まとめ

推しへの愛がしっかりと次の人に受け継がれていた。このことから、モノとモノだけの循環ではなく、それぞれの思い出も循環していたと考える。そして、新しい推しとの出会いがあった。これも、推しだけとの出会いだけでなく、ボックスを通じてや、SNS上

などで新しいコミュニケーションが生まれ、元の持ち主と引き取り手のコミュニケーションが生んだ出会いなのである。

## 謝辞

「燃やしたくないモノ」ボックスは、推しへの愛や、思い出、記憶からなる、京都芸術大学の皆さまの「コミュニケーションの新しいカタチ」が集まった新しい出会いの場になりました。皆さまの推しへの想いに感謝申し上げます。

	<b>仕掛ける側</b>	<b>仕掛けられる側</b>
<b>目的の二重性</b>	新しいコミュニケーションの場を作る	家にある手放したいけど手放せないモノを手放す
<b>誘引性</b>	ゴミ箱型にすることで、モノを入れるという装置だと意識する。	
<b>公平性</b>	誰も不利益を被らない	